

## 【研究ノート】

# 都会の隣人を愛しなさい(2)\*

吉 田 信 彌

## 第2章 都会の隣人は冷淡か？

### 1. ニューヨークの事件

隣人を自分のように愛しなさい、と新約聖書にある。しかし、都会の隣人はとかく冷たい。その冷たさを象徴するような事件が1964年にニューヨークで起きた。キティ・ジェノビーズ(Kitty Genovese)刺殺事件である。キティ(本名はキャサリン)は自分が経営するマンハッタンのバーから車で帰宅し、アパートへ歩く途中で突如刺された。助けを求めて悲鳴をあげたとき住人の一人が犯人を怒鳴りつけた。犯人は一旦彼女から遠ざかったが、再び彼女を襲い、殴り倒して悲鳴をあげる彼女を刺し続けた。それは35分間続いた。そのとき38人のアパートの住人が目撃者となったが、その中で警察に通報したのは1名だけであった。犯人は行方をくらまし、とうとう逮捕されなかった。

まさに人情紙の如し。いかにも薄情な事件ではないか、とアメリカ社会では議論が沸騰した。なぜ誰も助けの手を差し伸べなかったのか。助けに行かないのには、事件に巻き込まれたくないとか、自分に危害が及ぶかもしれない、という理由もある。しかしその一方で、人間として困っている人を助けるべきだ。せめて110番するくらいのはしてもよいのではないのか。アメリカを創ったピューリタリズムは失われたのか。隣人愛はどこに行ったのか。と憤りと非難の声も止まない。

話題の事件にはさまざまな人がさまざまな説明をする。そのいくつかを紹介しよう。

一つ目は、道徳がいよいよ退廃した、という説明である。昔はこうでなかったのに、と徳が失われた現在を嘆く。昔はよかったとする尚古主義である。昔のほうがほんとうに道徳が高かったかは実は疑問なのだが、物は貧しくとも昔は心が清かったというような論はいつの時代もある。

次は、農業社会から工業社会へと社会が複雑になっていくにつれ、人間が人間らしさを失っ

---

\* 本稿は、前号(教養学部論集158号)に掲載された研究ノート(吉田, 2011)の続編である。

たという説明である。人間らしさを失うことを「疎外」という。この疎外論の祖は『資本論』を書いたマルクスである。マルクスは、人間の作った社会がだんだん人間から人間らしさを奪ってしまうので、共産主義革命によってそのような社会を転覆し、新しい社会を築くべきだ、と主張した。簡単に言えば、社会が人間を薄情にしたというのである。

疎外は難しい言葉である。もともとはヘーゲル哲学の言葉である。疎外によって失われる人間らしさとはどのようなものであるかという問題もある。疎外という概念の難しさ、共産主義の古さ、あるいは革命という血なまぐささに、なじめない人もいるだろう。しかし、それでも、おかしい社会によって人間がおかしくなってしまったのではないかという思いは、都市化が人間を変えていくのではないかという、第 1 章（吉田，2011）で指摘した不安と通じる。それゆえに、この都会の薄情な事件が人間性を喪失しつつある社会の問題ではないか、と考える人は多い。

社会がばらばらになってしまった、という説明もある。価値観や道徳が社会の構成員の間で一致しない。アメリカ建国当時のピューリタニズムで社会が一体化することはもはやない。いろいろな人がそれぞれの思いを抱き、お互いのつながりがもてない。そうになると他人に手を差し伸べるところか、興味さえ示さなくなる。社会の中に共通の価値観がなく、人が互いにばらばらである状態を社会学者デュルケームは「アノミー」と呼んだ。薄情な事件はそのアノミー状態にあることを示すという論である。

## 2. ダーレイとラタネの仮説

このように諸説が飛び交う中で、ダーレイとラタネは事件が起きたときにそこに居合せた人の数が問題ではないかと考えた（Darley & Latané, 1968）。その事件に立ち会っていたのが一人なら、助けるか助けないかはその人一人が責任を負う。しかし複数の人がいるなら責任は軽くなる。誰かが助けるだろうと、結局助けに向かわなくなる。そして助けなかったと責めを負うのは自分一人ではない。事件に居合わせた人の数が多ければ、責任はますます拡散し、援助へと行動を起こすことは少なくなる、とダーレイとラタネは考えた。

彼らはその考えを実験で証明しようと構想した。先述のような哲学的あるいは社会評論的な論議をしても、ディベートの練習にはなっても決定的な結論を得ることはできない。そこで、誰もが後から確かめることができる実験でもって確かな証拠を提示して、彼らの仮説の正しさを証明しようとした。

彼らの仮説は、助けを求める人がいるという状況に遭遇したときに、周囲にいる人の数が多いほど援助に行かなくなり、援助するにしても行動を起こすまでの時間が遅くなるという

のであるから、実験では何らかの援助を求めるようなトラブルが演出される。そのとき居合わせる人数の増減を操作する。それが実験の独立変数である。従属変数は援助する人の割合と援助の行動を起こすまでの時間である。

### 3. 方 法

彼らが実験に用意したトラブルは癲癇<sup>てんかん</sup>の発作であった。実験室に招かれた被験者は、同じように実験を受けた被験者（実はサクラ）の一人が癲癇発作を起こすという緊急事態に遭遇するように仕組まれた。

**独立変数** 癲癇発作が起きたときに居合わせる人数の条件は、2人（被験者と発作の演技をするサクラの2名）、3人（被験者とサクラのほかに1名）、6人（被験者とサクラのほかに4人）の3条件である。後述するように、条件の男女比などを細分化したが、独立変数の基本は被験者も含めた実験に居合わせた3種類の人数であった。

**被験者数** 2人条件の被験者数は13名、3人条件が26名、6人条件が13名であった。被験者はすべて女子学生であった。

3人が居合わせる条件では、メンバーの条件を変化させ、別途その影響を検討できるようにした。癲癇発作を起こすのは男子学生であるが、女子学生の被験者に対して、居合わせるのが女子学生の場合と男子学生の場合と病院の救急病棟をときどき手伝う医学部の教養過程の男子学生が含まれる場合との3つの条件を設定した。さらに男女差をみるために、被験者が男子学生で、居合わせるのが女子学生という条件を設定した。

被験者はニューヨーク大学の心理学受講生である59名の女子学生と13名の男子学生であった。総数は72名のはずだが、後に65名という記載がある。被験者の総数とその割振りの詳細は読み取りにくかった。有名な論文ではあるが、そうした読み取りにくい記述には注文をつけたい。

**手続き** 被験者は大学生活にある個人的なトラブルについて討論するというふれこみで、集められた。被験者は、廊下づたいに並ぶ個室に一人ずつ案内され、対面では個人的な打ち明け話をしにくいだろうから、討論者同士は互いに匿名にし、討論はインターホンを通して行う、との説明を受けた。

被験者を案内した実験者は「討論を外で聞いている人がいると討論がしにくいでしょう、討論の中身は後でうかがいます」と告げ、その場からは離れ、部屋の外の廊下には誰もいないと被験者が信じるように導いた。それは癲癇発作が起きたときに近くにいる実験者が対処してくれるだろうとの期待や予想を被験者に抱かせないためであった。実験者は不在で、そ

のとき居合わせるのは討論に参加した各部屋の人だけである、と被験者が思う状況にしておいて、そのときに癲癇の演技が始まるように仕組まれた。

インターホン討論では、一人ずつしか意見を述べられない。その間、他は聞き役である。喋っている人以外の人の声は聞こえない。2分くらいで自動的にマイクのスイッチは切れ交代する。一人ずつ自分の大学や大都市での生活の悩みなどを一通り順番に語り、次に各自の悩みに一人ひとりが順番にコメントし、最後はフリーに討論すると説明がされた。実際にはフリー討論編は実施されなかったのだが、告白編、コメント編、フリー討論編の3部構成の討論会であるとの装いがなされた。

告白編の口火を切るのは、やがて癲癇発作の演技をするサクラの被験者であった。それはどの条件でも同じであった。そのサクラは、自分がニューヨークと大学になじむのに苦労していること、そして非常に躊躇しながら、そして明らかに戸惑いながら自分が癲癇持ちであることを語った。その後順番に他の被験者が自分の悩みを告白した。告白した人数によって何人が部屋にいるか、つまりそこに居合わせた人の数がわかった。これが告白編である。

癲癇発作の演技開始は、コメント編の冒頭である。2人が居合わせる条件では、サクラの次に被験者の番となり、その後すぐコメント編に移った。3人条件では、告白編は発作を起こすサクラ、次にもう一人の被験者（実はこれもサクラ）が告白し、最後の告白者が被験者であった。この順番は一定であった。6人条件では発作を起こすサクラに続く、本物の被験者を含む5名の告白の順番はランダムにされた。告白編で真実の告白をするのは被験者1人であった。その告白内容はここでは問題ではない。他の告白はすべて録音であったが、インターホンを通して聞くので被験者はその声の主が部屋にいないとは気づきにくかった。

告白編で癲癇持ちである悩みを打ち明けたサクラに再びマイクが回り、コメント編が始まるところで、サクラは次のような発作の演技を行った。二言三言静かにこれまでの討論についてコメントし、次第に大きな声で支離滅裂になり、途切れがちに助けを求め、最後は息を詰まらせながら、演技の声を止めた。

台詞の声が消えるのはマイクのスイッチが入ってから70秒後であった。125秒後にはマイクが切換わるので、その部屋から音は一切聞こえなくなった。マイクが切換わることを被験者は事前知っていたので、発作の言葉が聞こえなくなり、マイクが切換わるまでの約55秒の間に物音がしないことは、発作を起こした人が依然として在室中であることを意味した。なぜなら、ほかの誰かが発作を起こした病人を運び出しても、病人が自ら部屋を出ても、その物音が聞こえるからであった。

**従属変数** 助けに行く人と行かない人の割合（援助率）とどれだけ早く助けに行くかが従属変数である。6分経っても部屋から出てこない場合は助けなかったと判定したので、発作

開始から被験者が部屋を出るまでの時間が重要であった。

部屋を出た被験者と6分間部屋の中に留まった被験者はその後どうするかというと、部屋を出た被験者は、外で待機していた実験の助手を見つけることができた。部屋に留まった被験者は助手から実験の終了を告げられた。どちらの場合も、助手が事情を説明し、被験者の感情を落ち着かせるようにした。

そして被験者は一定の質問紙への回答が求められた。質問紙には発作が起きたときに思ったことや感じたことを記入した。被験者の個人的な特性を調べるために、マキャベリズム、アノミー、権威主義、社会的望ましさ、社会責任などを測定する16の尺度にわたる調査票が用意された。被験者はそれに回答し、自分の簡単なプロフィールも報告した。

#### 4. 結 果

**演技の信憑性** 被験者が実験者に発作の勃発を伝えたときの様子、実験が演技であったと知らされたときの驚き具合と発作の最中に被験者がつぶやいた内容（マイクを通して録音されていた）の3点から判断して、被験者のほとんど全員が発作を本物とみなした。ほとんどと述べたのは2名の例外があったからである。この2名は先の被験者数には含めなかった。

**居合わせた人数と援助行動** ダーレイとラタネの原典にある FIG. 1 と TABLE 1 をここでは図 2-1 として示した。FIG. 1 の縦軸は助けた人の割合（援助率）、横軸は発作の始まりからの時間経過であった。居合わせる人数の3つの条件（2人=2 pers. 3人=3 pers. 6人=6 pers.）ごとに援助率の推移を示した。

居合わせた人数が増えるにつれ、援助行動が消極的になることが読み取れた。実験の終了

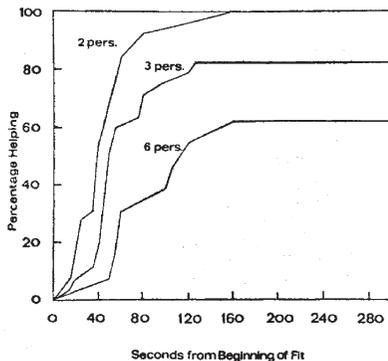


FIG. 1. Cumulative distributions of helping responses.

TABLE 1  
EFFECTS OF GROUPS SIZE ON LIKELIHOOD AND SPEED OF RESPONSE

Group size	N	% responding by end of fit	Time in sec.	Speed score
2 (S & victim)	13	85	52	.87
3 (S, victim, & 1 other)	26	62	93	.72
6 (S, victim, & 4 others)	13	31	166	.51

Note.— $p$  value of differences:  $\chi^2 = 7.91, p < .02$ ;  $F = 8.09, p < .01$ , for speed scores.

図 2-1. Darley & Latané (1968) の原典にある結果の図と表

までに発作を通知した人の割合は 2 人条件が 100%, 3 人条件が 81%, 6 人条件が 62% であった (図 2-1 の FIG. 1)。発作の終わらないうちに援助行動を起こした人の割合は、2 人条件では被験者の 85% であった。それが 3 人条件では 62%, 6 人条件では 31% であった (図 2-1 の TABLE 1)。

反応の早さの 1 つの指標に援助を開始するまでの時間の逆数を 100 倍した数値をとった。居合わせた人数が増えるに従い、数値は小さくなった (図 2-1 の TABLE 1)。つまり反応は遅くなった。

なお、援助行動をとった被験者は全員、発作から 3 分内に行動を起こした。発作開始から 6 分間を被験者に与えたが、もっと時間を与えたら助けに行きだす被験者が増えただろうとは考えられなかった。結果からすると 6 分までの必要はなかった。

**居合せたメンバーの構成と援助行動** 3 人条件では被験者が女性の場合と男性の場合を比較したが、男女差はなかった。居合せた (実際には声だけの出演だが) のが女子学生の場合と、男子学生の場合と、医学部の男子学生との条件の差もなかった。3 人条件だけの検討だが、グループの構成メンバーによる効果はみられなかった。

**援助の理由と非介入の理由** 実験が終了し、実験の仕掛けを被験者に説明した後に、被験者に援助行動をした理由、あるいはしなかった理由、発作が起きたときにどんなことが頭に浮かんだかなどを 15 のチェックリストなどで聞いたが、理由の手がかりは得られなかった。

被験者の言葉は少なかった。どの条件の被験者にも一貫した考えはない、との印象をダーレイとラタネはもった。居合せた人数によって行動が明白に異なる結果であったが、被験者自身は他者の存在は自分の行動に影響を与えなかった、と報告した。

**援助行動と個人的特性** マキャベリズムや権威主義などの 16 の尺度の得点と援助に行くまでの時間との相関を検討したが、両者の間にほとんど関係はなかった。態度や性格などの個人的な特性の差異によって援助行動を説明することはできなかった。

## 5. 考 察

### 5-1 責任拡散説

ダーレイとラタネの責任拡散説が結果をもっとも明快に説明した。居合せた人が多ければ、責任は拡散する。そのために人助けは行われにくくなる。

被験者にもグループの構成にも男女差が出なかったのは意外だったかもしれない。それは先行研究の結果と矛盾する。その点をダーレイとラタネは次のように説明した。けんかの仲裁、消火活動、溺れた人の救助は男性的な人助けである。腕力が必要であるし危険が伴う。

しかし通報は女性でもできる人助け（援助行動）である。この実験の救助とは、発作が起きたと誰かに通報することで十分である。したがって、男子学生と女子学生に差が生じなくとも不思議ではない。

人助けをしない冷たさを産業構造や都市化などの社会の変貌から説明する論がある。ダーレイとラタネの実験は、冷淡さを社会のせいにするそれらの論を否定する。もしそうならば、皆が援助行動をしないだろうし、周囲の人数によって影響されることはないはずである、と。

個人差要因、例えば権威主義的か、マキャベリズム的かどうかなどの態度や性格特性の差異によって援助行動が影響されることもなかった。少なくともこの実験で測定した個人差の指標と人助けとは関係がなかった。個人的な特性というよりその置かれた状況、つまりそのとき居合せた人数が主たる要因であった。

くだいていえば、責任拡散説は周囲に人が多いと人は徳をなくすという説である。徳の高さや信心の深さという個人の違いによって人助けをするかどうかが決まるのではない、と責任拡散説は説く。周囲に人が多くいれば、それだけいろいろな人がいるのだから、人助けをする奇抜な人（良きサマリア人）に巡り会える率は高まるのではないか。人数が多いほうが義侠心のある人の出現を期待できるのではないかと考えることもできる。ところが、実験の結果は、人数が多いほうが助けられる率は低くなった。隣人愛が状況に左右されることのない揺るぎない宗教心の発露であってほしいのは宗教家の理想かもしれないが、責任拡散説は、隣人愛はそのときの状況次第である、と教える。そしてその状況の中で決定的なのは周囲に存在する人の数である、と主張する。

## 5-2 行動と言語報告のずれ

誰かがやってくれるだろうと、人任せにしてつい安易な方向に流れる。日常生活でもよくあることである。しかし、この実験の被験者、とくに援助行動を起こさなかった被験者もそのように人任せにしたのだろうか。被験者自身はそれを否定した。他者がいようが、いまいが、あるいは何人いようと、それによって自分が助けるか助けないかは影響を受けなかった、と彼らは実験後に実験者に表明した。

ダーレイとラタネはこの援助行動を取らなかった被験者達との応答から、被験者が気にかけていたのは発作を起こした（と装われた）人であって、それ以外のそこに居合わせた人のことはほとんど考慮していなかった、と報告した。そして、その被験者達は発作を起こした人のことを気遣っていたことから、彼らは決して冷淡で無関心な人間ではなかった、と判定した。

もちろん、その被験者の言葉を鵜呑みにはできない。実験が終わって、実験の仕掛けがわ

かってからの述懐である。助けに行かなかった被験者は誰かが助けるだろうなどと正直に話していくかもしれない。そこに自己弁護的な言い逃れが入る可能性はある。しかし、被験者の言葉はそれほど計算されたものとは思えず、自分で自分の行動を説明できないようであった。

居合わせた人を顧みないのは助けに行った被験者も同じであった。助けに行った人も、行かなかった人もその理由を的確に述べることはできなかった。要するに、被験者達は誰もがよくわからないうちに行動していた。実験の結果は居合わせた人数が行動に影響したことを示すが、当人の意識にはそこに居合わせた人の数は入ってこなかった。

当人の行動とそれについての言語報告とが食い違うことは心理学では珍しくない。人は「言行不一致」(吉田, 2006)である。ニスベットとウィルソンは自分の心理過程についての本人の言語報告が必ずしも実態を明らかにするものでないことを示す優れたレビューを発表した(Nisbett & Wilson, 1977)。その論文にもダーレイとラタネのこの実験が引用された。ダーレイとラタネの研究は、援助行動(helping behavior)に関する責任拡散説という仮説の新しさが脚光を浴びたが、言語報告と行動のギャップを端的に示す例としても注目できる。

では、われわれは人助けをするにしろしないにしろ、その理由をわからないままに行動してしまうのだろうか。自分でも気づかないものに動かされてしまうのだろうか。その点についてダーレイとラタネはどう考えただろうか。

ダーレイとラタネの研究の出発点はキティ・ジェノビーズ刺殺事件の再発防止である。もし他人を助けない無関心が個人的な資質によるなら、それを矯正する方法が対策となる。時代や社会が非人間化を進めるならそれを防ぐことは容易ではない。しかし、援助行動を阻害したのはそのような要因ではなく、その場に居合わせた人数であった。そのときに何人の人がいるかは状況次第である。それは運任せと思えるかもしれないが、もしそういうものだとわれわれが知ったならば、それを克服して人を助けることができるのではないか。真の原因を知ることによってわれわれはわれわれの傾向性を克服し、キティを見殺したような事件を防ぐことができる、というのがダーレイとラタネの見解である。

## 文 献

- Darley, J.M. & Latané, B. (1968). Bystander intervention in emergencies : Diffusion of responsibility. *Journal of Personality and social Psychology*, **8**, 377~383.
- Nisbett, R.E. & Wilson, T.D. (1977). Telling more than we can know : Verbal reports on mental processes. *Psychological Review*, **84**, 231~259.
- 吉田信彌 (2006). 事故と心理 なぜ事故に好かれてしまうのか 中央公論新社.
- 吉田信彌 (2011). 都会の隣人を愛しなさい 東北学院大学教養学部論集, **158**, 49-62.  
 〈[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_158/pdf/kyoyo\\_158\\_04.pdf](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_158/pdf/kyoyo_158_04.pdf)〉